

風隱集

北原白秋

青空文庫

震前
震後

薄日の崖

白菊

目にたちて黄なる薺までいくつ明^{あか}る白菊の乱れ今朝まだ冷^{つめ}たき

黄の薺^{しべ}のいとど目にたつ白菊は花みな小さし咲き乱れつつ

さえざえと今朝咲き盛る白菊の葉かげの土は紫に見ゆ

独遊ぶ今朝のこころのつくづくと目を留めてゐる白菊の花に

菊の香かよ故しわかねどうらうらに咲きの盛りは我を泣かしむ

咲くほどは垣内かきつの小菊影さして日のあたり弱きしづもりにあり

独居ひとりゐはなにかくつろぐ午たけて酒こほしかもこの菊盛り

この垣内かきつ見つつ狭けど白菊のにほふおもてのかぎりなく澄む

籬の菊

鎌倉小町園にて

日あたりの籬ませの白菊小町菊盛り過ぎつつなほししづけさ

白菊や香には匂へどうつつなしよにしづかなる日ざしあたれり

菊の影いくつしづけき真柴垣日は移るらしあたるとなしに

かの薰るは日当りの菊日かげの菊いづれともわかぬ冷たき菊の香

日向べは観てしづかなり菊の香のうつらがよふひと日遊ばむ

草の穂

父母のしきりに恋し雉子のころゑ 芭蕉

日当りと日影のすぢめ目につきてしきりにさびし穂にそよぐもの

かやの実

榲^{かや}の木にかやの実の生^なり、榲の実は熟^うれてこぼれぬ。こぼれたる
拾^とひて見れば、露じもに凍てし榲の実、尖^{とが}り実の愛^{かな}し銃^{つつ}弾^{だま}、み
どり児^こが頭^{づむり}にも似つ、わが抱ける子の。

かい擁^{かか}へかやの実ひろふ朝寒し子が掌^てにもしかと一つ持たしつ

かいかがみ拾ふ木の実のか青さよしみじみと置く今朝の露霜

みどり児が力こめたる掌たなひらに一つ手たにぎる小さきかやの実

霜じみの一つかやの実押し据ゑて何ぞこの子があつき掌たなぞこ

かやの実も愛しとは思へかい撫でて吾がみどり児が愛しかな頭つむりげ毛

みどり児の尖る頭よく似ればあはれよひろふ凍てしかやの実

今朝も見てここだ現^{うつ}しきかやの実やほらよほらよと子に拾ひつつ

かやの根にかやの木地蔵まして子らも立ちたり霧の木しづく

地にころげここだ下凍^{した}むかやの実はかきさがすまも愛^{かな}しかりけり

籐椅子の上

何あそびうつつなき子ぞ椅子の上にゆらぐ頭^{つむり}のうしろのみ見ゆ

うつつなく頭^{つむり}揺りをるうしろ影わが子ぞと見つつ息もつきあへず

独よく遊ぶ吾子や久しくを声ひとつたてず真日あかるきに

氣にふかく遊ぶ吾子や後附きてうかがひほほえみ息つむ我は

あれの児が独あそびの幼くてはずみあまれば手を挙げ叫べり

葉鶏頭の種子

うらなごむ今日の日向や種子とると刈りて干したり了へし葉鶏頭かまつか

莖も葉もあかき葉鶏頭根刈りして地にたたきをり房の種子たねがら殻

掌^ての汗にしみみ粒だつ紅^{あけ}の種子葉鶏頭の種子は柔ら揉みつつ

ねもごろにけふも了へたり葉鶏頭の千金丹は布の袋に

薄日

いつしかと寒うなるらし見つつ行く薄日の崖の竹煮草のかげ

竹煮草の枯がれの葉のがさつき葉をりふしの風も陽もかげらしむ

枯れにけり今は芙蓉の実の殻の中干割れつつ光る絹の毛

冬晴

日あたりのうらめづらしき竜胆の蕾がふたつ開きつつある

日あたりの冬の薊に吹かれ来て揺れてゐる蝶の影のうつつなさ

月と孟宗

円かなる月の後夜としなりにけり孟宗の秀の大揺れの風

照りあかき月の夜にしてさわさわし孟宗の揺れのあの寒さはや

物すごき藪の月夜の時あかりかげるかと思れば騒ぐ葉の影

目のさめて悔しと思ふ祈りごころ許されざらむ月に対へり

榧と栗

この寺の老木の栗のいが栗はまたすがれたり榧の木の前

榎の木はさしも青けど落葉木の栗はあらはに枯れにけるかも

百日紅 試作

百日紅が咲いたさうなよほうら見ろ隣の寺の藁屋根のつま

百日紅が寺に咲いたぞひさびさだ遊びがてらに出て見よかなも

百日紅が紅う咲いてる寺のむすめが手まりついてるその花かげで

百日紅が紅う咲いたとながめてゐた紅う咲いたと誰か云つてゐる

柔かなは仏^{てのひら}の掌であるほんのりした百日紅の紅みが射して

百日紅が紅う咲いたと知らしてあげなお母様^{かあ}でもお見えなさろで

出入^{ではひ}りに紅いな紅いなとながめてゐるとなりの寺の百日紅を

百日紅の花のさかりも過ぎまするどれよはなれの障子でも張ろ

このお父さ 試作

このお父^とさ抱^だきあげ抱きあげほれ坊やよ紅^{あか}い花がと何処^{どこ}迄行くぞ

ほれ坊やよ百日紅が咲いてましよ紅いな紅いなさしあげて見しよ
ほれ坊やよ海の向ふが見えましよが美しいでしよ差上げて見しよ

茶の花

まだ秋だに早やお寺の茶の花はふつこぼれてる茶つ株のねきに
幽かなる茶の花よりも濃き青の厚葉がかなし一枝摘めば

函嶺の冬

須雲川上流

山川のみ冬の瀬とろに影ひたす椿は厚し花ごもりつつ

須雲川寒き日蔭の岩がん床しやうにぬめる氷の面めんのかぐろさ

箱根蘆の湖

塔が島馬酔木あしびしみ立ち岩床に暁かけて凝る垂氷たるひこれ

父^ち母^はの枕にちかく目ざめゐて湖に寒^{かん}のとほり来る聴く

父母の間^{あひ}に入り寝て思ふなり二^{ふた}方^{かた}の寢息^{あに}豈やすからず

父母と元旦に見てひと山の薄すさまじく穂に老^ふけにけり

母のこと父のみ前^{こと}に言^{こと}わけて申し繼^つげどももとな寒さや

箱根旧道

箱根路は山松かげに萱の家の一戸二戸寒し木屑干しつつ

山^{やま} 岨^その 石^い 畳^{した} 道^{みち} にあたる日のこのあかるさよ冬と思ふに

昼ながらいまだ凍^{いて}たる岨の隈つくづく踏めば草もみぢ濃き

霜の凍^{いて}昼もきびしき草の葉にハترون紙敷きてゆで卵食ふ

柴の火にたぎるちろりの酒の色とくとくとよみて口寄する吾は

日は寒し今は仰げば松ヶ枝の間^{あひ}かがやかし^{かし} 檮^ほの秀に見ゆ

茨の実

丘窪の棚田の畔の茨の実^{あぜ}は玉し綴れど霜ふかきかも

短日

このごろの日の短かさよ裏藪の下萌の草の霜も凍^いてつつ

たまたまは

たまたまは暇ありけりかやの木のコぬれのゆれも目にとまりつつ

ひえびえと明りて近き小竹の揺れ硝子戸越しに見つつ飯待いひつ

書讀みて心安けきたまたまは我やさしかり餅もちひなど焼く

葉鶏頭

葉鶏頭かまつかは秀ほより照り透きつぎつぎに下葉紅く燃えぬ褪す時もまた

早く咲きし芙蓉が先きに萎えにけりいつまでか紅きこの葉鶏頭は

椿 一首

山椿山椒の魚が棲む淵にあかあかと映りたけぬらし春

江の島拾遺

島山の紅きつばきの花かげに足さすりをり母と休らひ

子らが編む花環の糸は鮮やけき椿の蕊の中つらぬけり

天神山拾遺

花^{はな}檜^{がし}に月の大きくかがやけば眼ひらく木^ぎ菟^うかほうほうと啼けり

箱根山麓の歌

山の鉾杉

去冬、箱根に遊びて

日あたりの山のなぞへの鉾杉は葉の叢^{むら}深し群れこもりつつ

霜に焼けておほかた枯れし竝鉾の老木の杉に陽があたるなり

杉の秀^ほに冬至過ぎたる陽のいろのほの温^{ぬく}き山も遠くには見ゆ

溪^{たに}岨^{そば}の日かげの暗き青杉も上^う面^{はづら}焦げて冬^い去^いなむとす

寂ふかく雪に焼けつつ鉾杉の叢^{むら}葉^はが層^{かさ}も春立たむとす

杉日和

このごろは寂びて明るき杉山の日和つつきを飛^ひぶ鶉^よ多し

冬の丘寂びし杉生すぎふの日あたりの見のこちごちに眺め足らへり

落葉たく煙しめらふ朝の間まは杉垣の焦げもにほひ深く見ゆ

たまさかは夕焼の赤き海を透かす叢杉の秀ほゆゑいよよ親しも

伝肇寺の朝

雪あかり冴えてましろき駒ヶ嶽まさ眼に北はかげの濃く見ゆ

墓の石一つ一つに雪つけて見かなの愛しもよ童わらはがごと

櫨^{はじ}の木にとををに白く積む雪は枝にもつめど実の房ごとに

何にまして白くすべなし墓地裏の雑木^{ざふぎ}の雪のいとど明^{あか}るは

雪ふりぬ何といふことなく搔餅焼き裏かへしをり火を赤くつぎて

雪に立つ竹のあはひの氣に立ちて紅^{あか}くかがよふ春さりにけり

雪ののち今朝しづかなり大き窓の北の明^{あか}りに書^{ふみ}は読みつつ

堂ヶ島の雪

一月二十八日、堂ヶ島に遊ぶ。翌日帰宅。

箱根路は早やおもしろし山松やみ雪ふりつむ二三本見ゆ

畔^{あぜ}は畔^{あぜ}田は田の型^{かた}につもりたりおもしろの雪やおもしろの雪や

雪しろき千本鉾杉下に見てわが行く^そ岨^ばよ冷^ひえとほりつつ

明るさよ杉の叢^{むら}葉^はにつむ雪の揺るるかと思ればしづれてぞ見ゆ

暮の岨の雪踏み来る荷駄馬の蹄^{あし}鉄^{がね}に穿く^あ大^わき草^{らん}鞋^ぢ

向つ山まだ明れどもこの日暮ひえびえと落つる細き白滝

しみしみと夕冷えゆふひまさるしら雪に岩うつり啼くは河原鶉かはらひわかも

雪に来る河原鶉かと耳とめて碁石うちゐついまだ灯ともさず

したしくは妻子とこもれ雪ゆきあかりのこの谿底たにそこの日の暮の冷ひえ

おとなしく炬燵こたつにはひり日暮なりふりつつやみし雪のあとの冷ひえ

雪ふかしここの谿間たにまの湯の宿の湯氣ゆげのこもりによくぬくもらむ

岩群の岩の畳みの雪あかり暮れつつしありて暗くらみつつあり

凍みひびく夜よの溪たにがはの岩床の大岩床の間まど近くちかに寝る

早春の朝餐

二月十三日、佐藤惣之助、大木篤夫両君と、妻と四人
裏の丘にのぼり、落葉を焚き酒を温めて朝餐す。後少

時散策して歸る。

杉の根の縁白笹に燃ゆる陽のこの閑けさ^{しづ}よたまらふ見れば

杉むらに杉の落葉を拾はなと拾ひつつゐてなにか素直さ

澄みたまる陽のしづけさよ熊笹のむら笹が奥も燃え^{あか}明りつつ

澄みたまる陽のぬくときにはひり来て妻とし拾ふ枯葉杉の葉

日あたりの杉の落葉の裏じめりやや手に冷き春さりにけり

落葉搔く我の歩みのおのづからよき日あたりへ向ひつつあり

山窪の陽ざしに遠き青杉も半ば焦げつつ花つけぬ皆

山はまだ花やや寒き榛の木はりきの枯れ枯れの枝に蒿雀あをじつどへり

春あさき榛の木原こばらの空あかり今朝は蒿雀の飛ぶ影迅はやし

丘に来て酒あたたむる友情なからひも稀なるが故に春の愛かなしさ

雪折の青の真竹さをはあはれなり三つ割に白く走り裂さけたり

この寒きが竹の花かと手にふれてまたのぼるなり竹の上の岨を

春はまだ青からたちの刺とげの秀ほのするどに冷ひやき眼の触さやりなり

杉垣の小杉若木はその葉さへ紅う染み出つ漆葉のごと

続堂ヶ島行

二月十七日、前田夕暮君と、妻と三人堂ヶ島に遊ぶ。

風祭村

春はまだ浅き菜畑、白き鶏とり日向あさるを、水ぐるままはるかたへの、窓障子さみしくあけて、女の童わらはひとり見やれり、外との青き菜を。

反歌

この春や水車するしやが立つる水だまのまた大きなり芽柳のもと

停電の電車を降りてやや暇あり車掌は温ぬくき向ふ畔あぜにある

日は小ちさけど早や松風の春あさき旧海道を行く道者あり

小山田の雪解ゆきげの田居かにゐる鶏けのわづかに青む物あさるなり

まだ二月水車が傍わきの窓あけて誰か見てゐる青き菜のいろ

脊戸川に飯櫃いひひたし春浅し白飯しらのつぶのしろく透く見ゆ

粗あらむしろ春は浅けどこぼれ陽ひの薔薇ばらいろ温ぬくし子豚啼きゐる

見の飽かずさびしがりゐつ赤き実の南天のかげの水にゆるるを

湯本駅

前山の雪の斑^{はだ}らを仰ぎ見てやや言葉多し登山電車待つ

檜多き山の幾^{いく}襞^{ひだ}檜の秀^ほに雪のはだれの白う凍^いてつつ

檜山の檜の秀^ぶごとにつむ雪の鹿の子まだらの冴えの明るさ

登山電車

この山は老櫟おほし見てゆくに斑^{はだ}らの小雪凍^いてつかぬなき

鷹の巢かやどり木の団^{たま}か一つ寒き櫟の梢見はるかし登る

凍^{こご}りし雪解^とけつつかあらし明星ヶ嶽^{ねずみ}鼠色ふかめつつ上^もる靄^{もや}絶えず

枯山は縦に焼き切り幅びろき防火線黒し雪のこりつつ

谿^{たに}々^{だに}の雑木^{ざふき}の芽立^べ紅をふくみ雨こまやかなり春か来ぬらし

堂ヶ島

おのれ
自凍てて硬ばりし雪か岩角の犬羊齒を打てばしやきりしやきり白
き

堂ヶ島春近むらし雪解水とどろきたぎち昨日にも似ず
ゆきげ

雪解靄嶺にはこもれ枯山のなだりは明し日のあたりつつ

谿底の萱家の氷柱つらつらに萱の色沁み冬去なむとす
つらら
い

林泉のしづけき水に目をとめて紅き鰭ふる魚も見にけり

岩蔭の井の辺にひたすさねかつら咲きにけるかと見つつ過ぎにき

春と云へどいまだ色なき谿隈は橋ところどころ吹きさらしの岩

陽^ひのあたる向つなぞへの枯萱のほのあたたかき春としなりぬ

向う谿の青の女小竹^{めざさ}の秀^ほの揺も冷^ひえびえと見ゆれ冬のそれならず

梂つがの木の夕日むかに對むかふわが眺め早やさむぎむし内うちへはひらむ

落ちつかぬ湯やどの春のほの寒さなになれば子を置きて来にけむ

硬かたゆき雪いぼりに尿しつつも先いそぐ友が提灯に言葉かけて居る

時をり提灯の紅あかきさしつけて雪ふかき杉の葉裏見上げつ

丘の昼餐

二月十八日、晴、前田君と例の裏山に酒を温めて歓語す。後、水之尾より荻窪を散策して帰る。

榛^{はり}の花くれなるふかし遥か見る丹沢山に雪の消えつつ

雪しろき阿夫利の山の尖^{とが}り秀^ほにひたひたと触れて青き空はある

榛の木の花の盛りを声に出づる薬罐の酒の煮えのしづけさ

ほたほたと搔きて垂らせる朱しゆの漆榛の雄花は春早き花

陽のもとに酒あたたむるのどけさを今日も樂しと来りつどへる

春あさし酒を柴火にあたためて白木しらゆふぐも綿雲の行き消ゆる見む

ねもごろに酒はぬくめむ杉山の杉の落葉は火を燃すによき

日あたりに杉の落葉を燃しつけて酒わかす間まの晴れの潮騒しほざめ

おのづから滞らざらむ落葉火に薬罐の酒も音を立つるを

春あさき櫳の葉ならむ陽のさして風こもるらしきこまごまの照り

枯くさにしばし酔ひ臥て^ねほかほかと身もぬくもらな心ゆくまで

狭間田の田尻にひびく瀬の鳴りのなにかしら近し春としなりけむ^{はざまだ}

雪解霽いまだはこもれ松山の高きを移る頬白のこゑ

峯の脊に辛うじてもつ夕ばえの後かがやきも暮れはてむとす

芝崖に草木瓜赤き日おもての水之尾道は行きつつ愛し^{かな}

今思へばかの音なりし水車なりし櫟^{くぬぎをか}丘越えて見の春めくは

ああ早春、桐の木畑の桐の木の実の殻逸^それて鵲鴿翔ける

竹藪にはひる徑^{こみち}のよく見えて裾明り寒しせせらぎのあるか

はきはきと竹馬の跨ひろげゆく子が連多し藪外^{そと}の風

蜜柑袋かつぎ来る子をよびとめし友さびしからむ五つ六つ買ひぬ

この日ごろ野山にまじり人にまじり遊びほれてゐるそれが愛^{かな}しも

積藁に南天の実のかげ揺れて子ら騒ぎ出づる日の暮の晴^{はれ}

わが妻が厠借りにとゆく農家の縁さきに早し紅^{べに}つばきの花

府川氏宅に寄る、友不在

はちはちと蜜柑の硬^{かた}き葉を燃してゐろり大きなり蜜柑山の家

大き籠を擁^{かか}へ来ましぬ蜜柑なりいまだ馴^{なじ}染まねど友が母刀自
夕風に小さき子を負ひ蜜柑畑の岐れ道まで来らす爺かも

弟を迎へて

二月二十五日弟来る。行いて裏の丘に例のごとく酒を
温む。細雨、後曇り。

たまさかは来よとねがひき来しゆゑにこの弟愛し酒なと温めな
おとかな ぬく

芝丘のつばらの小松春浅し行きても愛でな酒わかしつつ
め

杉の秀にわづかにぬくき日のあたりなにがなうれし弟と見て
ほ

この日やや雨もよひ暗し土耳其赤の榛の木の花の房のみ揺れつつ

しゆんしゆんと煮立つ酒かも吾が弟と春早き丘に來り火をたく

やどり木の藥玉くすだまかがる春あさき櫓の雨も見の親しかも

芝崖に妻が見つけし草木瓜の花赤きからに弟と掘る

この岨や焼芝つづき草木瓜のところどころ咲きて水之尾みづのを近し

日の在処ありどくろく幽けき女松山の春雨親し田雲雀のこゑ

夕湿る女松山めまつゆき野山ゆき弟おとと語らふ父母の事

道の辺の落葉か薄くなり
にけり堇咲くべき春や近づく

白梅五品

一

白梅のかかる盛りを父母と遊び
まつらでうたたうとしも

白梅の咲きの盛りをうれしうれし
弟も来ぬ弟嫁おとよめも来ぬ

これの世におなじ父母いただと弟と愛かなし白梅のもと

われ歳としたけ老いし父母守まもる事のさびしとは思へ白梅の花

この春も老いし父母かなしくて為すなき我や遠く遊ばず

二

梅咲きて空も明るか声立てて児は喜べり外とに出づる度たび

抱かれて吾が児が触さやる梅の花萼うてなが紅あかしその枝のさきに

三

今を盛りの梅花の影を双手^{もろて}とりて歩^{ある}かせば歩くこの児がかはゆさ

梅咲きて吾が児は愛^{かな}し歩むとし歩み蹴上げぬ小さき赤き靴を

四

梅咲きて白くしづけき日おもては見つつよろしも草^{くさもちひ}餅食^はみ

五

この朝や山の迅風はやちの風息かざいきにかがやきて白し梅の花みな

春はいま梅花の盛り七面鳥が風おこるたびに眞ま正と面向もきて来る

春夕小閑

春あさき夕日の光かやの秀ほにまだ射しあかるしばし暇あり

山莊の晩春

水之尾道の春

裏丘のしもとがかけの花すみれ乏しくは咲けど咲ける皆濃き

下畦したあぜの赤きしどみ櫛子を根に掘るとかがみゐてさびし高压線のうなり

焼芝にしどみ櫛子燃えたつ高畦たかあぜの下道かへる新入生と母

朝ひらく黄のたんぽぽの露けさよ口寄する馬の叱られてゆきぬ

山ゆくと山の^{しきみ}櫛の黄の花のよにつつましき春も見にけり

山松の夕日のこぼれひろひ来て我幽かなり雲に会ひつつ

霞を愛す

言^{こと}にいでて春は山辺の夕がすみ愛^めづてふならね山にこもりぬ

夕かけて双子の山にゐる雲の白きを見れば春たけにける

濃き淡き遠山霞あかねさし夕べは親し日の洩れにけり

山の尾の壁ひだの五百重の春がすみなごめる空は夕かけて見む

まだ白き野火のけむりの春じめりゆふべは靄にこもらひにけり

春はまた山辺の子らが防ぐ火の走り火あかく燃えて暮れつつ

なごやかに今日もありけりさみどりの蕨わらびは結ゆひて灰汁あくにひたしぬ

独居の春

春山は杉も青みていつしかと鶯の声が鶉に代りぬ

春といへば青き鱗の杉の花粉にふきいでてうち霧きらふめり

ほたほたと搔きて垂らせる朱のうるし榛はりの雄花は春早き花

ひとこと
人言よほとほといとへ寂しくてえは堪へずけり春をこもるは

春いまも前の小藪の花なづな見つすべなし見てをのみる

誰か知る人か来けらし露の臺の大きき愛づる話声すも

庭前小景

春の靄こもらふみれば木いちごの一重のしろき花明るなり

直^{ひたつち}土の春のしめりに今朝見えてすれすれを飛ぶ^{やは}柔き蝶なれ

山吹の咲きしだれたる窓際は子が顔出して空見るところ

褪^あせやすき蘇枋の花にふる雨のやや夏めきてまぶしもよ今朝

露の葉に薄翅うすばの蜻蛉あきつ匍ひいでて日の照らしふかし夏は来くらしも

水之尾の晩春

浅々あさあさに夏はみどりの花つづる新にひくは桑細枝ほそえ見るべくなりぬ

桑の芽にかがよふ雨の大きさよ肥桶積みて馬曳きて来も

雨あとや虎杖いたどりの芽のくれなるは踏みてやわらかし斑萌かもの氈

陽に向ふ山路は暑し雨ばれのきらきらし黒き砂金の光

山村の水之尾村は落ちたまるつばきの紅あけに今日にぎはへり

水の辺の馬酔木あしびの若木小さけれどほのかに群れて花つけぬらし

この春や水車が立つる水だまの早や大きなり芽柳のもと

桐畑はほほけし臺の数よりも露の葉おほし春も過ぎつつ

この里も春過ぎたらし篁のおもての照りに人が田を鋤く

よく湿^{しめ}る萱屋は低^{しんめ}し新芽^{いっほん}ふく一本の茱萸^{ぐみ}の銀鼠^{ぎんねず}の雨

山ゆゑに深山つつじも咲きたらむ明うなりぬと眺めてくだる

日は午なれ明神ヶ嶽の裏空に山火事の煙ただならぬかも

春雨

一

わが窓の孟宗竹^{ちく}にふる雨はややまだ寒^{ふみ}し書を読みつつ

藪かげの吾が宿ゆゑにふる雨の幽けさ満ちてこもらひにけり

二

白檀びやくだんの幽かそけき花にふる雨の雨あし繁し細く見えつつ

三

わが宿の竹の林の春の暮仏焰ふかし蒟蒻のはな

註・仏焰とは喇叭状の花の前に垂れたるもの

わが宿の竹の林の春^{じめ}湿り昼やや闌けて軒に音あり

四

このしめる雨や春雨木の間^まゆく馬のしりがひ紅^{あけ}褪せにけり

竹藪の春

一

藪華曼は紫けまんとも云ふ、紫雲英に似て紅紫色の花
穂をひらく。

朝なさな洗面室の窓あけて眼に露けきは藪華曼の花

裏藪の竹の根方の藪華曼花紅うつけて早うしばみぬ

二

髭からむ藪蒟蒻の太茎ふとぐきは春し闌けたれ立ちのけうとさ

紫の藪蒟蒻の花かげはまだ土ふかき蟾蜍ひきこもの隠り処ど

春の藪くぐもる蟾蜍ひきのふたたびと声つづかねばひとりうとしも

三

わが宿の竹の林をのぞく子はつばきのあかき首環かけたり

四

朝なきな湿^{しめ}り親しき竹の根に筍生ひてうれしこの頃

春過ぎて夏来にけらし筍のみづみづし根の紫の疣

疣多き根太筍^{ねぶをけのこ}その根掘り紫ふかき畑にほふり出す

春はいま吾がかきさがす筍を隣の藪も気にはずむらし

土かむるいまだ幼き筈は落葉搔きわけ指に掘り出す

山寺の春

一

梅もややひらきそめたりたまさかは詣でて見ませ山の寺にも

わが宿は土間にも外とにも若竹のさやにのびつつ白露むすぶ

二

伝肇寺春は老木の花つけてこちごちに明る山のしづけさ

山寺は緋桃しら桃枝あまた剪りて売りけり花の盛りを

三

寺ずみの二人の媼おうなさみしからむ眺めては居れど花の向うの空

四

出で入りに紅し紅しと見し椿山門のわきに落ちてかさみぬ

坊が妻あかき椿をひろふ子のうしろ出でゐてあはれなるかも

五

この春も巡礼講を率て行くとあるじの僧はあわただしまた

日は永し巡礼講の寄合の媼が念仏山ざくら花

六

今はまだ梅の実小さし小糠雨のやや繁くして寺は寒かり

花めぐる父の御坊はいづらべぞ留守もる子らが見やる春雨

山寺の春も^た闌けたり秋田路の大きな葉に雨は音して

七

大和路の花より帰り三日四日は落ちるぬ僧か筍掘りをる

いつまでか栗のこずゑのあはれなるとなりの榎も花をつくるに

八

山寺は庭を畑とし馬鈴薯じゃがいもの根薯埋めたり秋待たむとす

白芥子の芽も葉も莖も食みつくす寺の小矮鶏こちやぼの追へどまた来る

九

片開く窓に猫ゐて何の木か障子にうつる春の日の寺

この寺は葬式とむらひとぼし花蘇枋いつしか褪せて葉のこぞり出ぬ

註・住職は秋田の人なり

§

たまさかは掃かれし墓か杉の花またすこし散りてそこら湿しめりぬ

関伽水にこまかに溜る杉の花今朝見ればみな浮きし沈みぬ

§

墓地裏を肥桶載せてゆく駄馬の嚏くさめ大きなりまめんぶしの花

註・まめんぶしは灌木にして可なり高し。春、淡黄色の
花房を垂れる。その形赤楊の花と似ている。

素木しらぎの卒塔婆のへりに来て跳ぬる

はたはた

の子のさみどりの翅

震前震後

芙蓉の季節

朝咲きて夕べは凋む木芙蓉きふようの花の紅あけゆゑ水うたせけり

毎朝、郵便夫来る

藪かげにあかき芙蓉のさく小舎こやをみみづくの家と知りて来にけり

朝あさ光かげにあかき芙蓉をほめてゐてすがすがし妻と麵麩パンもぎり食ふ

静ごころ闌けつつにほふ木芙蓉の顯うつしけ氣もなき真昼なるかも

地震なるの間も光しづけき秋の日に芙蓉の花は震ひつづけつ

吾が宿の朝あさ光かげごとに咲く花の芙蓉の盛りおとろへにけり

露

篠の秀ほにすでに夕べの大き露のぼりゐにけり生けるものごと

篠の秀は露を保てり揺りつつも涼しかるらむ涼しとを見つ

篠の秀の露のしら玉揺れつつや揺れつつし太^{ふと}る光放てり

篠の秀に光放てる露の玉ひとはじきしなば飛びも散りなむ

篠の秀に照る大き露子が指に触れしむとしてあやふく止めぬ

茗荷咲く

竹の根にほのかな花が咲いてるといふ真^{まこと}にほのかな藪茗荷の花

竹の根の夏の朝日に花つけてほの涼しきは茗荷ならむか

この秋

朝顔の露の干ぬ間と木の馬のくるまつけをり妻とかがみて

胡麻咲きてほのかに紅^{あか}き日たむろは珠数かけ鳩の呼び鳴くところ

白き月指さす吾^{あこ}子は唐^{たう}黍^{きび}の実の房にすら脊丈及ばず

この秋はいよよあかるき葉^か鶏^{まつ}頭の三^みもと二^{ふた}もと見てを過ぎなむ

水之尾の秋

この秋よ、雲は白うて、事もなき世にしあるかな。山村はここの
 水之尾、樋のへりにみそ萩さきて、みそ萩に水だまはねて、水ぐ
 るまやまずめぐれり、その水口^{みなくち}に。

反歌

水ぐるままはる樋口のかがやくは夕日か水にさしあたるらし

藤と松蟬

伊張山^{いはりやま}老木の藤の花房に霧かとも思ふ雲の通へる

夏はまた伊張の山のやまものこぼれ日しるくなりけるかも

花明る桐の木原の前の田は早や水張れり紫の水

髪につく楊^{やなぎ}の絮に気はつかず先あゆむ妻よ乳母車押して

風にのる楊の絮はすかんぽの花の崖越えて光りつつあり

乳母ぐるま押しつつのぼる日のくもり一木は白きからたちの花

日盛りの山からたちも棘の秀に乏しき花を白う保ちぬ

松の花黄に立ちそろふ日おもてを幽かに霧らふ雲のかげあり

山ゆけば照りつつ涼し青羊齒の淡き胞子も夏ならむとす

何の草掘りてゐるらむ日だまりの風脇に小さく妻はかがめり

松山に子が母待つと乳母ぐるま停めてをりけり松蟬のこゑ

早や早やも松蟬鳴けりききてゐてこの松山も暑しと思ひぬ

熟れ麦は照り眩^{まぶ}しかも乳母ぐるまの子が寝顔には幌をかけなむ

山莊にて

昼ふかき日の照りながらほのぼのと南天の花はいまだふふめり

梅雨の山寺

伝肇寺桃の茂りのいぶせてきのふもけふも雨は降りつつ

おぼおぼしく桃の茂り葉見て暮るる山寺の子らに雨の夜は来ぬ

坊が妻梅^{つゆ}雨^{あま}の雨間^まを出てはたく梅の実円し早や色づきぬ

乳母ぐるま傘さしかけて出でにけり梅雨のあがり^{あがり}を寺の外まで

この寺のはひりの径^{こみち}わびしけどまだしも明る釣鐘草の花

霖雨^{つゆ}しげし大^かき蝙蝠傘^{かうもり}低^ひくさし女^めの子なるらし坂のぼり来し

朽ちかさむ椎の落葉の霖雨じめりいとどにしろきどくだみの花

梅雨の寺湿らひふかし栗の穂と撈^もぎ後^{あと}の梅の葉のにほひして

寺わきの乏し穂麦を刈るひとは日暮^{ひぐれ}息^せき来る雨間うれしみ

寺わきを雨間せはしみ刈る麦は根に息^せき殺^そげりひとにぎりつつ

雨に刈る麦の手づかみひとつかみほさりと伏せていそぎ次ぎ刈る

山寺は麦刈りはてしこの夜さり唐^{からいも}諸の葉のみ雨に音しつ

朝光夕光

朝かげに早や咲きそろふ木はちすの一重の白き花を楽しむ

焼場道ややに咲きつぐ木はちすのよき朝^{あさかげ}光となりて来らしも

花^{はなむくげ}木槿いよいよ深しこの道や焼場へはひる道にかもあらむ

朝かげに咲きてすすしき木はちすの夕光^{ゆふかげ}も見ずときけばかなし
き

§

風立ちて夕光^{ゆふかげ}あかし刈り棄てにそこばくねかす夏そばの花

夕光のさわさわ^わ早稲^{わせ}の穂の間^{あひ}にはや咲きまじる白胡麻^{しろごま}のはな

山^{やま}畑^{ばた}の独活^{うど}の繁りに風立ちて秋来と云はば驚きなむか（消息）

藪抜けて唐からいも諸畑にそよぐ穂の猫じやらし吹く風も秋なり

昼の間はここの山家やまがも日の照りて鶏頭あかし童わらべのみるる

外そと庭のかの夕光にさく蓼たでの紅きを見れば風出でぬらし

夕光はあはれなれども犬いぬ蓼たでの花穂はうれし揺れの重くて

籠ながら涼し花もつ秋草はその馬柵ませ越しに黒馬あをが食みつつ

山はまだ毬栗いがくりあをし日のすゑにつくつくほうし鳴きしぐれつつ

外^{そと}庭^{には}に日暮れてはこぶ木の鉢は何の粉か盛る白き粉のいろ

茶の花

震災以来、広大なる隣の別荘への出入自在なれば、行きて遊ぶも心のままなり。素にして悠たるかな。この秋や。

秋さきてほろろこぼるる茶の花の日和みじかき世にしありけり

乏しくも今は足りつつ茶の花のにほふ隣を楽しみにけり

日あたりの広きお庭にまとゐしてわかつ昼餉は足らずともよし

この園の柑子の実りゆたけていよよろしき秋たけにけり

常なしと常に観つつも茶の花のにほふ日向ぞ寂びてよろしも

山水にかよふところはおのづからこの茶の花にかかはりにけり

山ごもり月日も知らず茶の花のにほふ日ざしにあひにけるかも

この庭のこれの日向よ寄り寄りにねもごろならむ茶のはなはみて

破^やれ焜^や炉ほのにあほがせ茶の花のにほふ日向に茶を立つらくは

まゐり路の寺の日向の茶の花も咲きていくらかこぼれたるべし

茶の煙こもらふ芝のなぞへ原日のあたる辺が薄うもみでぬ

枯芝にそこらくまじる豆蓼のまだ紅き見て食むむすびなり

吾が子は飯をこぼしてやまず

飯粒つく草のもみぢをあはれよと払ひつつゐて暑し日ざしは

箸もちて赤き蜻蛉あきつの影慕ふ吾子なりけり豆菊のはな

ふ。

妻は去年の実ならんといふ、われは今年のならむとい

日向辺はややほの紅き枯芝に茶の実こぼれて秋ふけむまた

目にとめて拾ふ茶の実のかそけきよ二つ三つ四つ手に鳴らしつつ

お茶の実を拾ふ吾子に着すべくは紅きスエタアもほころびにけり

山葵と独活

山葵と独活

なまよみの甲斐の須成すなりのよきをぢさ山葵わさび持て来ぬ春日よろしみ

太茎ふとぐきの八尺やさかの独活うどのひとくり無雑作にさげて笑ひ来爺くをぢさ

薄あかき秀ほはそろはざれ大うどき独活うど繩にくくりて二十本はあらむ

ほら見よと独活を持て来ぬ子を連れて見にも来よちふ畑の大独活

天そそる不二のうらべの山畑のまだ紅べにふふむとりたての独活

山百合の大き根七つたびにけり植ゑてながめむ庭の七ところ

あしびきの山百合の根は冷たけど百合の息満つ層かさふと太の球

ひと球つつ百合の根埋めてこのところ百合の芽出むと帰れりをぢ爺さ

爺さ云はく

山べにはやたら生へたるつくつくし都はかしこつまむほど売る

春浅き山田の畔くろくさぼけの草木瓜は刺は繁けど地面より咲く

渋柿の青柿漬けて味噌の香の染みつつ柿も味噌もうましも

椎茸や秋は持て来むみ山べは椎も老いたりさはに朽ちたり

干柿の粉をふく冬の日あたりのほのりほのりと老いて足りつつ

おほらかに不二の裾廻すそみの湖五つ見てとめぐりて来きたらせ我脊

山越すと脊負梯子に樽つけて男子揺り脊負ふ須成少女ぞ

山越すと山の少女が脊の樽に乗りても見ませ乗りおほらかに

紫の通草あけびの房の数花のかぞへて待たむ君が来こらす日

小閑

口ひびく山葵磨りおろし不二川や水上の瀬々のたぎち忍ばむ

山葵田の砂田片附きたぎつ瀬や不二の雪解の水みなわ泡はも巻く

山葵植ゑ独活を分けつつこのあした我ゆたかなり足りて遊べり

太茎のくれなるあさき秀ほの独活は吾がよき方へ褒めて分けなむ

紅べにあさき独活の酢びたしよろしなべ楽しむ酒はふふみふふみのめ

身辺

この春はとなりの御坊水たびず井の辺のつばきただに紅みぬ

となりびと日ごと言痛こちたしくれなるの椿も藪に落ちそめにけり

花多^{さは}に老木の梅の明れるは盛りみじかくなりたるらし

繁^{しじ}に出て帰れば吾子のいふ言^{こと}のこのごろ痛しおぼえそめにき

赤い鳥の選稿了へず落の臺立ちほほけたり花はじけつつ

今朝見れば花壇荒れたり足跡の大き吾が子にまたおどろきぬ

湯にをりて我と子と聴く春雨は孟宗と梅にふれるなるらし

ロダンのユウゴの首を見てゐる子かすけき地震なみに夜を驚きぬ

真夜中を紅き太陽見むと欲る吾が子はをさな窓べうかがふ

木曾川橋畔にある、雀の宿の主人（児童の愛護者）来
りて、その丘の命名を乞ふ。乃ち

君が丘遊ぶ童の多^{さは}ならば童ヶ丘と名づけたらなむ

童らと朝な夕なに遊びゐてけだし倦みなば遊ばぬぞよき

竹の秋

風たちてこまかに落つる竹の葉は日の照る方へみなちらふなり

竹の苞^{つと}しきり散らへり日向辺の音のかそけき家^やのはひりかも

大震抄

天意下る

世を挙げて心傲ると歳久し天地の譴いかり怒いかりいただきにけり

地は震へ轟とほき亨とほる生けらくやたちまち空しうちひしがれぬ

この大地おほなる震避くる術なしひれ伏して揺りのまにまに任せてぞ居る

言挙げて世を警むる国つ聖いま顕れよ天みいかりくだ譴みいかりくだ下りぬ

大君は天の譴怒いかりと躬自みづから照らす御光みかげを謙をしみたまへり

国民くにたみのこのまがつびは日の本し下忘れたる心ゆ来れり

大正十二年九月ついたち国ことごと震しんとほ亨利のちよりと後世警め

牛

筐に牝牛草食む音きけばさだかに地震なみははてにけらしも

牝牛立つ孟宗やぶの日のひかりかすけき地震はまだつづくらし

春鶉

冬ごもり

冬ごもりうらさびぬらし。隣べは日のあたるよと、萩も枯れ萱も
枯れぬと、よろしよと、見つつぬくもる、吾が和ぎごころ。

反歌

おのづからうらさびぬらし萩の戸のへだての垣も枯れて匂ひぬ

日あたり

つれづれと眺めあかぬを、枯れしとて萩は刈られぬ。ほほけしと
薄も刈りぬ。ほのぬくみ刈りつる人も、うちたばね、かつぎてい
にぬ。日あたりの、となりの庭の、そのよろしさを。

反歌

枯れはてて萩は薄は刈られける日のたむろべのよろしみ来るを

をさなき春

土見れば土の香立^かつを、はなはだし、春はをさなし。露の臺いづ
 らにふふむ。つくつくし萌え立つやいつ。置く霜のややに浅くも、
 こぬか雨ややに繁くも、裏藪や、堇さく辺^べの、いまだなじまず。

反歌

隣の春もをさなしたき火して梅のつぼみをしたしとを見れ

寺の井のぼむぶの把手とりて今朝見れば春雨しげし動かしにけり

見え来る春

かにかくにうつろふ冬や、隙間洩る風を寒みと、破やれはてし家に
こもると、はらうつ雨のこまかに、置く霜の置くと解くれば、
ふる地震なみのふると消けにつつ、おのづから霞立つ日ののどけくなり
ぬ。

反歌

いつしかとなごみ来ぬらし向^{むか}山^{やま}の地震^{なみ}の壊^くえ土萌えかすみつつ

福寿草

冬ごもり、こもりあかねど、寒き日は吾^あもちぢまりぬ。春まつと
妻は急^せけども、のどならむ家も壊^くえたり。子が愛^めづる薄^ブ葉^リ鉄^キの太
鼓、その紅^{あか}き片^{かた}面剥げしに、土盛りて、せめて植ゑむと、福寿草
霜に抜き来ぬ、二株三株。

反歌

児が愛^めづる薄葉鉄^{ブリキ}の太鼓剥がれたり植ゑて眺めむ福寿草のはな

春鴝

おもしろの春や、この朝、花しろき梅のはやしに、をさな鴝^{もず}来て
 ををりける。草餅の蓬よろしと、黄粉^{きなこ}つけ、食みつつきけば、い
 はけなの鴝や子の鴝。ふふみ音^ねの、まだなづむ音^ねの、うぐひすの
 鳴まねびをる。頬白のふりまねびをる。しづ枝^えゆり、ゆり遊びを
 る。移り飛びをる。

反歌

梅おほきとなりやかたは明るくて花のさかりををさな鴉飛ぶ

あるとき

春鳥の枝^えに揺る声の、ゆく水のかがよふ音の、朝風の松のひびき、
夕風の^{ささ}小竹のさゆれの、おのづから我よあはれと、あはれにも恍^ほ
れて、しらべて、あるべきものを。

反歌

一ひといきに歌ひ成してぞおもしろきこのごろくやし思ひ凝りつる

のどか

子よあそべ、父も遊ばむ、母呼ばむ、来り遊ばむ。日あたりにつくしも立ちぬ。つくしべに蓬も萌えぬ。枯萱の裏むらさきの、ほのぬくみ、かがやく根には、あなあはれ、白きなづなの花も群れたる。

反歌

うらなごむ春日よろしみ蓬生^{よもぎふ}や花のなづなを踏みて暮しつ

匂だちとみに春めく蓬生の下べのしめり踏めばかなしも

春の草まだやはらかしとりまぜて摘むとためけり子らが帽子に

つくし

土筆摘み、妻と子と摘み、うすあかき土筆の茎の、緑だつその秀^ほ
 の粉^{こな}の、かなしとも吾^あが妻も摘め、をさな児もしみみ摘みをる、

そのをさなさを。

反歌

一つ^{ひと}一つ摘みし土筆をつくづくとまた植ゑてをりもとなをさな児

種子蒔き

鍬入れて、繁^{しじ}に篩^{ふる}ひて、搔^しきならず土はよき土。春雨のよべのし
めりに、けさ蒔くや、種子はひなげし、金蓮花、伊勢のなでしこ。
向日葵は間^まをよくあけて、枇杷のべに糸瓜は寄せて、蒔かずしも

朝顔夕顔、おのづからまかせたらなむ、垣の根かたに。

反歌

盛り土に足あとつけて子も蒔くと画ゑの種ぶくろ日にかがやきぬ

木彫の人形

このごろは

このごろはくつろぎにけり。歌よめばよくもあしくも、墨磨れば濃けれうすけれ、うれしくも恍^ほれて書きけり、かなしくも恍^ほれて書きけり、ただ楽しみて。

反歌

歌ふらくおのれ楽しむものならし楽しみてあらむひとりこもりて

月光と魚

爺^{をぢ}が張る四つ手の網に、月さしていろくづ二つ。その魚のくちび

る紅^{あか}き、この魚の脊の鰭青き、現^{うつ}とも思^もへばつめたく、幻と見れ
ば霧^きらひつ。けだしくも息づく物の、水よりは空や明るき、水離^{さか}
り空やさみしき。春浅き潯陽江の、この月の魚。

反歌

月蒼き潯陽江の春浅しふなべり低め四つ手張りたる

たださへや月の光は霧らふらし四つ手に跳ぬる水の江の魚

口あけてぽちりと紅くそめにけり小さき木彫のいつくしき魚

魚売り

魚売りの爺をぢが日永や、ふちびろの菅の編笠、たよたよと担おほこ棒かつぎ
 て、はらはらに片手まはして、前籠に魚かすくなき、後あとの籠魚か
 多かる。後の籠地にしひきずる。重かるらしも。

反歌

菅笠の爺をぢが日永となりにけりになひの籠のうしろさがりに

米と雁

米つくと、杵は踏みゐつ。雁射ると、弓弦張^{ゆづる}りゐつ。足に踏む、
をかしかりけり。手にし張る、あはれなりけり。米つきは下べ見
てゐつ、雁射るは空べ見てゐつ、とざまかうざま。

反歌

米つくとうつらうつらに踏む杵のこなた踏むなべかなたあがりぬ

雁射ると弓弦^{ゆづる}ひき放ち反^そる弓の小手にくるりとかへりたるらし

荒彫の牛

高砂の牡丹社の子か、命こめ、荒く彫りけむ。つたなけど静立つ
牛の、をさなけどゆゆし力や。男ごころよひたぶる恋ふと、下ふ
かく燃ゆる思の、えは堪へね、なほし堪ふると、遊びつつ遊び彫
りけむ、くるしくも寂びて寂びけむ、外^とには見せずも。

反歌

荒彫の木彫の牛のみぎり角ほきり欠きたり思ひかねきや

ある日の散策

父のごと眺むとすらしこれの子や春山霞ながめつつ来も

女童めわらべが脊せに結ゆひかつぐ弟おとの足触りつつ蹴けをり伸びし芽麦を

佇たちて見ていよよ歩まぬこれの子を甘菜吸ひほけ遊ぶ子らはも

この道よ踏むにはやはき虎杖いたどりの斑萌むらもえあかし子が手曳き行く

畑垣の風かぎよけ防木むくげ槿枯れはてぬ春の日ざしのかがよひにけり

崩え崖の櫨しどみ子の蕾しゆ朱の褪あせて雨の跳はね土つちしみみ附き見ゆ

電柱に吾子あこは耳あてうつつなし蕾のたんぽぽが帽に光れる

山ゆけば春は恋こほしき仏の座子と目につきてうたたかなしも

円丘まるをかの芽麦の畑に子が立つと後山あとしろし雪ひかりつつ

櫛子さく畦と見てしか歸さには忘れゐにけり子と行き過ぎぬ

山莊の立秋

草の香

空は見て頭^{あたま}がちなる子がひとり雑^{あらくさ}草の香の照りのしづかさ

天^{あま}づたふ日はまだ闌^たけず草ぶかにはずみてこもらふ幼な吾が子や

雑^{あらくさ}草の花の盛りは長からじ垂^た髪^{りがみ}ゆすれをさな垂髪

草の香にはずむ吾子あこゆゑはてはなしあはて角力すまひて父はころぶを

髪刈り

あれを見よ荒地野菊ぞ、こを見よははきぐさ帚はきぐさ草ぞ、藜こそ葉茎にも知
れ、こすもすの入り乱れたる、それ見よと、父母ぞわれら、草い
きれ暑きさなかを、立ちまはり、早やをへむぞと髪刈ると、よき
簍に、子を坐らせて。

反歌

秋づけど草の香暑し子が髪の垂りいとほしみ愛^をしみ刈り居る

月夜

草深野月押し照れり咲く花の今宵の苔^{ふふ}み満ちにけらしも

雑^{あらくさ}草の花咲き煙る夕月夜まうらがなしも歩きて見れば

たわみ飛ぶ鳥影見れば雑^{あらくさ}草原朧たき月の光照りたる

りりとして鳴く虫の音は夏蕎麦の月の光にた闇けにたるらし

小閑

山に経る吾が幾秋ぞ目にとめて実のかなめなどしみみ見知りぬ

寒蟬

毬いがくり栗の目につきそめて染しむ声の寒蟬かんぜみならしつくつくと啼けり

山はまたつくつくほうし鳴く声のめねくすずしき秋立ちにけり

茅蜩

いなのに茅蜩^{かなかな}啼けり子は覚めてすでにききゐつその茅蜩を

茅蜩の啼きづるきけば眉引の月の光し白みたるらし

一つ啼く茅蜩ときくに音につぎてこも^{あさけ}こもに啼く朝明の茅蜩

春の明けを清^{すが}し茅蜩音に湧くと吾が心^{こころど}神よ揺りつつ透る

わらはべ
童のたまゆら寝覚めあはれなり茅蜩の声はききてねむりし

向日葵

二階に臥^{こや}りて久し向日葵の今は垂^{うてな}れたる萼のみ見ゆ

向日葵は円^{えんずゐ}蔬黒しまだ暑く子とかがみゐて痒^{かゆ}き蛎^{ぶよ}うつ

かぐろくも円^{えん}き花^{くわしん}芯や向日葵の花み^をな了^をへて西日暑かり

青萱

青萱に朝は流らふ日の光また
総あげまき角のうつら蝶追ふ

萱の根のいよよにほてる日のさかり口赤くあけぬ蜥蜴出で来て

庭の一隅

返り咲く黄の山吹のはかなさよ砌の照りに影さす見れば

白檀の土用芽見ればかたへ乾す梅の赤きは塩にふき出づ

雨の日

雨けぶる孟宗見れば昨きのの夜の颱風のなごりけだしこもれり

孟宗のしだりいぶせくなりにけりしたべ払はむ雨のすき見て

柿の葉にふる雨見ればつづら果みのここだく青く頻しぶ吹きはねつつ

虫をきく

初夜後夜の虫の声こそあはれなれ時のうつりに音ねいろ代へつつ

耳とめて幽かに聴けや虫の音の一つ澄めるあればすだき満つるあり

一つゐてとほる声あり月あかりすがしくやあらむ揺りつつ鳴けり

蔵経に月の光ぞ満ちにける一つころろぐこほろぎの声

青柿に灯ほかげさだまる夜のくだち啼く虫のこゑのひとつとほれる

竹林の書齋に病床を移して

秋づきて土に親しき物の根は見つつし親し寝ねつつし見む

おのづから細み来ぬらし日向辺の物のはしにも影の引きつつ

日おもての小竹ささの靡きは明るけどしきりに涼し秋は来にけり

眺めつつ夕づきぬらむ竹の根からむしの苧むしの日ざしとみに移りぬ

臥こやりゐてつくづく久し萩の葉の露の一つに我目とめをる

白月天にあり

真日中をとわたる月の朧たさよきのふもけふも海は荒れつつ

八朔の波の音とぞなりにけるおのづからにし秋は満ちなむ

離家の庭

竹の枝に馬追啼けり良^{あたら}夜の涼しきがほどをわれは湯を浴ぶ

夕花のおしろい咲けば水うちてそこらいつぱいに虫の音湧き来も

篠の秀は露つきやすしかぎろひの夕の乳くばる音ちかづきぬ

枇杷の枝に星の生れ待つ夕涼をほのかに覚むる吾子が声はも

あはあはし星の出を待つ夕ごろうらひもじもよこの揺りごころ

篠の秀に露澄みとほる星月夜坐り幽けく吾も保たむ

寺藪

秋は早や小竹ささの根かたに水引のつぶさに紅あかし咲きにけるかも

こぼれ陽に小蓼れうすずしき朝の間は茗荷も秋の香に立つらしき

風たちてこまかに落つる竹の葉は日の照る方へみなちらふなり

竹の苞つとしきり散らへり日向辺の音のかそけき家やのはひりかも

篁にそよぎ閑しづけき日の光吾子あこが昼寝ひるいの時ちかづきぬ

篁に深うはひるは閑けくて夕づく秋の西日なりけり

葉茗荷にとどまる蠅の三つ二つ日向ま近き道の端^はにして

藪茗荷ほのかに咲けば寺の子の誘ふともなく吾子も出でつつ

寺畑は夏もけうとし立ち莖の蒟蒻の葉の張りて澄みたる

夕風

夏はまだ夕かげ永き柴の戸にねもごろふふむ薦の花かも

ひもじくて臥^{こや}り暑けき夕風はとうすみの翅^はの来るもうれしき

火星近づく

病快し

夕かげの斜面の道ぞかびろけれ並らび駈けあがる我と妻と子と

この夜ごろひむがし親し大きな星赤き火星の近づきにけり

水うちて赤き火星を待つ夜さや父は大きな椅子に子は小さき椅子に

浪の音に妻とい対^{むか}ふかかる夜は星合の空を来る小鳥あらむ

ある星の夜

浪の音昼は忘れつ星合のこの夜すがらに高うおもほゆ

天の原広き夜頃も家ごもり我あわただし書きはつぎつつ

砂まじり白きザボンの落^{おち}花^{ばな}の雷管に似し星の夜に思ふ

伝肇寺の立秋

朝あさ光かけのおもてに見れば山松や全またくしづけく秋めきしかも

朝光よすずしとを見れ炒いる声の油蟬居ればにいにい蟬居り

小さき釣鐘は地上に据ゑたり、緋の射干咲けり

射ひあふぎ干ぎの日射に隣る鐘の疣いぼかがやき染まず秋にはなりぬ

伝肇寺老木の木槿朝咲きてかかる日射に地震なみはふるひし

午の庭にて

憤る裸の子なれ地面ぢべたに寝て陽にはまぶしき眼をほそめ居り

月満つ

小竹ささごもりひびかふきけば蜂の子ろ月の光に営みにけり

御堂跡にはやほろほろし白の胡麻月の光の射しにけるかも

円けて隈ある月の明るさよ今宵は小竹の揺るる秀に見ゆ

§

月の路やや移るらし昨夜^{よべ}よりはいくらか風も涼しくおもほゆ

野分の頃

隣の秋

萩むらにすでにこもらふ虫のこゑ朝な夕なを隣りて住めば

萩すすきにほふ日頃の親しくて通らせてもらふとなりの道を

隣べは秋いち早し萩すすきながめまさりぬ道をうづみて

萩すすき観つつ隣ればうらやすし今さらかはす言のすくなさ

さしなみのにほふ隣となりにける萩見薄見楽しむ吾を

身を惜しむ

吾^{わぎのち}命やまた若からじねもごろに身は省る時にいたりぬ

人常にすこやかならず朝露の藜のみどり観つつ飯いひほ欲る

「節酒の箴」を思ひて

朝顔の露の干ぬ間に食む飯はほの涼しうて白き飯ならむ

深き酒せちにつつすむ目醒めざめあり茗荷の花を観つつ思ひぬ

病はかばかりからず

白き飯久しくとらず蓼の穂の粒だち暑き日のみつづきぬ

目だたぬ門

目にたたぬ門のかなめに咲きつぐと朝顔はよしからみてのぼる

置きまさる露にふふめど朝顔の明日咲く花もちひさかるべし

§

眺めつつはかながれどもいや紅くあか百日紅は咲きつづくかに

百日紅花明らけし声ありて父よと呼ばふ子におどろきぬ

§

ほのあかき立穂^{たちほ}の薄光るなり愛^{かな}しかる子とい寄りさやらふ

朝露の穂のまだあかき糸薄をさなかる子よ父は守らむ

§

裏丘のなぞへすずしくなりにはけり薄もあかき穂にそろひつつ

§

簞に起居たちゐすがしむきのふけふしみみに紅き水引のはな

穂に分きて水引紅き竹の根は常に濡れてよしその簞を

ほの寒く恙ある身のをさなさよ金水引の穂など引きつつ

秋夜

くだまきは轡虫の異名なり、郷里にて用ふ。

宵はまだ啼くくだまきの気けぢか近くて照明シヤンデリヤ笠親し童話読みつぐ

くつわ虫爆はぜて気近き外の藪に赤み恋こほしき月円くあり

男童は啼き爆はぜる音がよきならしくくだまきよしと夜に喜びぬ

くだまきぞ宵は爆はぜたれ子がい寝ねてすすむしの音のみ今は透とほりぬ

浪の音とどろかぶらへうち消へず鈴虫の声がひとつ透りぬ

良夜

常よりは月夜明るき棕櫚の葉に糸瓜さがりて風そよぐ見ゆ

良^{あた}夜^{らよ}と月はあかれど雑草の見ゆるかぎりは穂にさびにける

野分だち孟宗さやぐいなめは朗らながらに月かたぶきぬ

テニスをはじむ、子も伴なり

野分だつ茅萱がむらに飛び逸れてテニスの白き球ははずみぬ

寝顔

月は見てねむり吾が子か眉引のおほに明るみ下笑めるかに

小夜ふけて吾子^{あこ}が寝顔のかがやくは望月の輪か照り宿るらし

子はいみじほのぼのとして交らふか父と母とのおもざしがあはれ

母と子の夜

蟋蟀の啼くまも愛^をしみ手ぐさとり母の乳ゆらにゆりし子は眠^ねぬ

蟋蟀の声澄みとほる夜くだちて睫毛^{まつげ}の黒き吾子^{あこ}をさまりぬ

母と子とまどろみ深き夜のくだち雨に浸^ひて沁む蟋蟀のこゑ

蟋蟀ぞしきり鳴きつげ夜越しふり冷えゆく雨の灯^ひに照らされぬ

童べに母の乳滴^{した}る夜明がた蟋蟀の声は冷えてやみにし

竹窓観雨

外の藪のあかつき雨や玻璃まどに電球の線の黄に映りゐる

一色と竹の葉に澄む暁あけの雨硝子戸あけて音にし立ち来も

竹の葉にふる雨聴けばおのづから揺りはこぼれてまたたまるらし

澄みつつし音こそこもらへふる雨の垂りゆるがせり竹の葉竝を

雨の後緑冴え来る竹の葉のしたたる雫その葉映せり

孟宗の根に生ひまじる篠の葉のなびかふ見れば雨伝ふらし

竹の葉にふる雨観つつ時久しつぎつぎと幹を水ながれ見ゆ

若竹に百舌とまり居りおもしろと友が見にけむその百舌啼くも

おなじく夜雨

竹の葉に雨降り居らしま青くも灯影流らひ燃えゆらぎ見ゆ

芙蓉咲く

芙蓉咲く窓べに伏せてアルミ鍋飯櫃とよし朝日射したる

朝光に芙蓉咲き満つ茅の家の^やしかすがによき吾が家かなしも

吾が童あかき芙蓉の門に居り秋の朝日の射しにけるかも

地のおもてまだ安からず咲きむかふ芙蓉の日射おぼにふるへり

百舌来る

ひえびえと百舌が音来る雨あとはまだ青柿の蒂も濡れつつ

百舌の鳥音に急^せき啼けばさえざえし夕風立ちて秋は来にけり

隣の井の辺

白芙蓉紅き芙蓉と層み咲き上なるがさびし白うにほひぬ

茗荷竹林に咲く

わすれ草茗荷をもがばほのぼのとその芽に白き花つかぬ間を

露じめるをさな茗荷の着る袷まだほのあかし早うもぎたり

香にさみし茗荷の花や日の洩れてまだし露けきひとつ房花

秋霖^{あきづゆ}雨のふる雨長し地に抽^ぬけば茗荷の花も下冷えにけり

颱風の頃

颱風のおどろ吹き分く花生薑^{しょう}タオルかかぶりそこら引き結^ゆふ

細雨尽きず

草くづに蓼の紅浸^ひて垂り繁きこの秋雨や地ににじむべみ

鶏頭の葉の冷え青き雨あとをしみじみと集^よりて凝^こる心あり

鴨跖草

鴨跖草^{つゆくさ}に冷やき雨ふるこのあした夕刊と朝刊と濡れてとどきぬ

鴨跖草は何に咲きつぐ青梅の夏よりかけて秋霖^{あきづゆ}雨もなほ

鴨跖草に交る嫁菜の雨なれば鉄条網の垣も親しき

鴨跖草の露と思へや数まさり綴れる見れば瑠璃の勾玉

白萩

朝なきな雨はふりつげ白萩のこぼれきらねば我は観るかも

二百十日つひに過ぎたり白萩のしるくこぼれて雨はららやみぬ

白萩の露分きかぬる子がつむりいとどしく愛しこぼれ花つけて

吾が子

吾の子を愛しと思へば人の子と分きへだちつつ早やかたぶきぬ

自づ似て父の子なれや子は激し堪へねば投げぬ手に触るるものは

葉鶏頭の秋

葉鶏頭に風吹き添へば朱なるやうれ葉火に立つ騒めきにけり

葉鶏頭やうれ葉黄に立ちつぎつぎと下葉揺り煽る燃えうつるべみ
子よ見よや庭は燃えたつ葉鶏頭の獅子がしらにし今朝輝やけり

葉鶏頭の秀ほの燃えたちてふる雨の長月の雨の霽るる間はなし

秋夜虫を聴く

雨の夜は腸冷えやすし早寝して啼くほどの虫の音を愛をしむ吾は

聴くほどはすだきかなしき虫の声うちかたぶきて寝らえぬ吾は

ある虫は品まさり啼けまされるはひとり澄みつつ妙にさびしも

寄り寄りにすだく虫あり一連に継ぎは啼けどもかへてわびしも

二くさに三いろにもきく虫のこゑ夜の厠べぞわびまさりける

よく聴けば脊戸と庭とに啼く虫の音をし競へり脊戸のが鋭し

啼く虫は品にたがへれ聴くほどは声のかぎりに夜露愛しめり

一連^{つれ}に啼きつつ早む草雲雀夜のほどもでとほりて冷えぬ

暁近く思ひつのるらし啼く虫の今をかぎりとはたや澄みつつ

鶏^{かけ}は啼け星の冷えにしふるごとき虫の音いろは夜明まさりぬ

月愈々欠く

弓張りの月の出おそくなりけり南瓜畑のくつわ虫のこゑ

懷炉灰

秋鳥かけだしさわたる耳とめて雨夜はせちに灯かげ守りゐむ

§

薄月に小雨添ひ来る夜のふけは身の冷えしるし懷炉灰つぐ

雨の夜は虫の音繼がず錠剤の三粒五粒取り出^で噛み居る

§

人の氣の衰ふ夜々は眼光まなこりうかがふ蜘蛛の大き影うつる

壊くゑはてし家ぬちの闇に鳴きはぜて轡虫は居り住みつくならむ

向日葵枯る

向日葵の藥しべの座黒う熟れにけり秋の日向もうらなつかしも

向日葵はいつしか花も了をへにけり輝かでよし眺めてあるに

五^{いつ}方^{かた}に五^をつ了^りへたれ向日葵の大きな黒^{くろ}き円^{えん}薬^{ずる}よしも

向日葵の枯れたる薬に雀来ていとまありげや種子つつき居る

向日葵の種つつくらし下向けて雀がつむり寂びにけるかも

向日葵の薬も枯れたり揺り移り雀おとなしほどよき照りに

花^を了^りへし大輪向日葵日に干して種子は鼠が皆引きにけり

曼珠沙華咲きいづ

竹の根に秀^ほの立ち赤き曼珠沙華この朝見れば数生ひにけり

曼珠沙華いまだをさなき秀^{あけ}の朱に指にぎりゐつ今年竹の根に

子が素肌ただに涼しく見し藪に数赤きかなや曼珠沙華出ぬ

寺の山風冷え来れば曼珠沙華ただ咲きつぎぬ外^とにも内にも

曼珠沙華そこらく赤き寺の山彼岸詣でのかげもふえけり

吾が庭もつひにわびしよ朝雨の藜がそばに曼珠沙華出ぬ

母が手に埋もる子ゆゑに曼珠沙華ひたと凝視^{みつ}めて尿放^{しし}つあはれ

中秋来る

親しくも幽けき秋や篁の外^{そと}べの柿のうれ葉赤みぬ

竹林逸興

熱海遊草

一、山莊の雨

生方敏郎君来る

吾が宿の春深からず、梅しろく、小竹ささの葉黄なり。霧雨のふれば
幽かすかに、鶯の啼けばをさなし。ああ、友よ、一日は過ぐせ、この
山のしづけさを。

二、逍遙先生の双柿舎を望む

柿双樹かきふたき、あれか双柿舎、春はまださびし梢や、かの丘よ、君お
はすらし、白梅の盛りなるらし、このきり雨を。

三、逍遙先生

おもしろの春の小雨こさめや、うら向けに羽織かぶりて、かつぎつぎ、石
いくつ飛び、童さびわらべ、声うちあげて、翁こそ歸り来ましぬ。柿が
もと、白梅がもとかうかうと歸り来ましぬ。先生らしも。

四、双柿舎の浅春

柿^{ふたき}双木梅^{いつみもと}五三本この庭の春しづかなり小雨^{こさめ}流らふ

春雨の柿の老樹の根に映えて八つ手濡れ居り坐りつつ見ゆ

きさらぎのこのふる雨にさびしくていとどしろきは梅の花かも

五、スケツチ

ここに来てなにか素直になりたらし先生の面を描きゐつ我は

大き耳持たすものかもまむかひに描きつつし嬉し吾が先生を

先生の片頬明るは玻璃越しに外の白梅の照り映ゆるらし

六、梅林にて

来^きの宮はここかよと思ふかたへ川梅白くちりぬ石^{いはむら}群が上に

行くところ梅咲き明る丘の道湯の気噴き立つ湯の町が見ゆ

目のかぎりしろき花のみすがしくて幽けかりけりまさに梅林

花しろき梅のはやしの日ひなぐもり曇せせらぎの音もかげりつつあり

七、梅林より

松かげの草の菴いはりは目立たず梅の花しろし埋むかに見ゆ（撫松菴）

花しろき梅の林の夕かげは目まなした下に見ていよよ閑けさ

尾羽黒き一羽の鶴の声なくてただ花ふかき林なりけり

八、帰山

吾が宿も梅の盛りかいちじるくむら小竹ささが間の白うい照りぬ

待ち迎ふ吾子が声こそ駈け来なれ梅の花しろきその小竹やぶを

五日六日相見ざる間にこの吾子や眼さかしう父になじまず

梅しろし吾が篁たかむらに飯食むと旅のつかれも忘れるにけり

竹林逸興

竹と我

眺めても眺めあきずよ、親しめば親しむがまま、幽けきもありの
さながら、かかはらず、またさまたげず、竹は竹、我は我ゆゑ、
竹がうれしも。

竹林逸興

簞に竹を愛でつつ歳久しつくづくと思ふよく住みにけり

簞に酒を楽しむ閑かなりいにしへびともけだしこもりき

簞の南なぞへの日のたむろ世にうま酒を楽しみにけり

おのがじし竹にい凭りて日を浴びてねもごろ楽し酒をふふめる

日たむろの竹の根方の鈴菜ぐさ下萌青し早すすろぎぬ

簞に酒を煮つつし将た安しとなりづからに柿放^{はふ}り賜ふ

冬の日

室内

玻璃戸透く陽はかがやかず樽柿の皮むかせかじるペン画描きつつ

毛のシヨール照り柔かし卓に置きてうすうすと引けり窓硝子の影

まさしくも鶉の音寒し窓の陽に子とあたりゐてペン画まだ描く

破れ壁に冬の西日の澄むところ影親しかも窓枠と棧と

窓掛の皺みに残る日の光蠅ふたつをり離るとなしに

豆柿

日にましに赤の^{あけ}豆柿にぎはひぬ山の目白の数つどひつつ

み冬来て豆柿あかる^{いへ}屋の空孟宗藪といつくしく見ゆ

子は起きて目も円らなり窓ぞひに豆柿が赤く一羽の目白

朝なさなふと目ざめつつ見るものに目白はうれし柿の実にゐる

柿の実に目白来てをり吾が見るとまだ知らざらし啄みほれぬ

玉つづるあけの豆柿よろしみとただに仰ぎて見てをる吾は

豆柿に目白群れ来る朝かげは窓に面出^{つら}し子と楽しみぬ

ひそけさよ小さき目白の枝越しに揺りつつきをりまんまろき柿を

小禽来てひと日楽しむ豆柿は吾^{あが}樂しみて食^はむにまかせぬ

豆柿に来る小禽を仰ぐ子に並び見あげぬものいひて吾も

豆柿に遊ぶ小禽のうらなさようつむけるがあり仰向けるがあり

豆柿に目白散らばりひそかなりたまた来たる百舌の大きさ

柿食みにつどふ目白も寒からし孟宗の枝に移り啼きつつ

鶉来れば目白逃げちり百舌の声に鶉翔けり去りぬ赤きは豆柿

わが脊戸や熟^うれて落ちたる豆柿は鼠が赤くかかへ去りにけり

下枝^{しづえ}には寒き葎のみ数ましぬこずゑの柿のいとど赤くて

明星ヶ嶽の山焼

のどけくもゆゆしき野火か山越しに黄^{わうじき}色の煙^{けぶり}ふた塊^{くれ}あがれり

物の爆^はぜ聴きて越え来る峰の脊を向うに燃ゆる山の大きさ

山ふたつ揺りとどろけり燃ゆる火の火立ほだちの走り添ひのぼりつつ

しづかなる昼と思ふをまなかひを山ふたつ燃えぬとよみ合ひつつ

さうさうと空揺りとよむ走り火の炎の幅は山を領しらせり

山ひと山なだりともよし鳴りのぼる大野火赤しひろごりにけり

春まひる向つ山腹やまはらに猛る火の火中ほなかに生るるいろの清けささや

春山は霞揺り分き熾^{さか}る火の火のごとに火鳴澄みつつ^{ほなり}

火は放てなにかのどけしうら霞み山かたつきて騒ぐ子らはも

先き先きと火は放つらし煙あがりしきりに白し山の根ごとに

心ぐく放つ炎のおぎろなし春山霞揺りて燃え立つ

山焼の飛ぶ火のあふりただならずまた燃えつぎぬとよみ響けり

篠の爆ぜたしかに深し向つ山鳴りしづみつつ火の渦巻きぬ

燃えさかる向つ山腹鳴り凄しみ雪踏みしき我は見にける

鳴り凄し山かた走る子等がかげおのが放ちし火にふためけり

春山の尾根もとどろに燃ゆる火のたちまちさびし消ゆらく思へば

物の爆^はぜ間なくとよめどうらかすみあたりの山のあやにのどけさ

大野火にいささか遠き山の尾をなづさふしろき雲にぞありける

うら霞みしかもしづもる山中を火の鳴りふかし聴きつつあるけば

向つやま山火消えはてひたさびしほのくれぐれを鶯鳴くも（小涌
谷）

向つ山夕冷早しくろぐろと此の面のなだり焼け果てにけり
ゆふびえ

とりよろふ山の晝峰の尾根ながら夕空ちかし火の赤みつつ
やつを

さねさし相模の嶺呂に燃ゆる火の夜ははた赤く見ゆる頃かも
さがみ
ねろ

尾根づたふほそき山火やまびの幾つづりつぎつぎ赤しこよひ今宵冷ゆべみ

峰づたふ夜の火が赤しつくづくも言惜しみつつ今は下らむ

山莊の六月

独り思ふ

電は昆婆羅山と槃荼婆の岩窟に墜つ。斯の比倫なき

（仏の児）は山窟に入りて禅思す。（シリクダ長老の

偈）

いなづまはんだばせん
電は槃茶婆山の岩に墜つ我も坐らむその電を

我竹叢の中にありて甘き乳糜を喫し、好く諸蘊を思念
し心を遠離に専らにして、嶺を占得せん。（ゴーサラ

長老の偈）

簞にもはらにそそぐ日のひかりゴーサラのごと我も坐らむ

この真昼我楽しめり南天のほのけき花もふふみたらしも

あきらけく我楽しめり竹の葉のしたたるみどり草と映らふ

藜伸ぶ

吾庭の梅^{つゆ}雨の雨間の花どころ^{あかざ}藜しげりて青がへる啼く

輝かず降らず蒸す日ぞ日につづく藜の伸びのただに紅みて
となりびとまだ貧しかり食む物にうれ葉の紅き藜抜きに来

裏丘

竹煮草ふふめば恋し^{こほ}我と子とほのけく^{もの}言を云ひつつ通る

夏すでに花穂立ちそろふ^{おほ}巨き草西洋大葉子は^{あこ}吾子より高し

ほのぼのとねぢ花紅し草に寝て今日明日生れむ子を思ふなり

子とかがむ外との日の照りはかぎりなし蟻の移動のつばらかに見ゆ

§

まさやかに今朝し垂りたりいついつと待ちにし栗のしだり房花ふさばな

梅雨のまをとなりの畑へくぐり出て落梅をひらふ吾が家の落梅

ある宵

火の赤き蚊取線香けぶるなり子と対ひゐて饅頭食^はみ居る

走る汽車クレオンで描けといふ子ゆゑ我は描き居り火をたく所

白き蛾のほの紫のにほひ羽の脊の重ね羽にこの夜ら闌けぬ

柿の葉

旅より歸りて

日の射して蛾のしきり飛ぶ夕つかた見^{みづら}辛くし居り紅き真萩を

藪茗荷花過ぎにけり帰り来てつくづくと子としいまだ遊ばず

竹の根にひとくきあかき曼珠沙華秋季皇霊祭の今朝見つけたり

柿の葉

白き猫ひそけき見れば月かげのこぼるる庭にひとり戯^{あそ}れぬ

柿の葉の濡れてかぶさる木片^{こばやね}屋根に夜ふけて来る月のかげあり

月よみの光すずしくなり^{あけび}にけり
通草^{さや}の莢はいまだ青きに

紫苑

宇都野研氏の庭

うち見にもなにか閑^{しづ}けき秋ぐさのよきととのひや日ざしあびつつ

この庭の日の照るかたに咲きむれて紫苑はうれし秋づきにけり

刈穫

野分過ぎ空うち晴れぬ朝戸出て梅の散り葉に目も染みにけり

影^{かげとも}面の棚田の狭霧うらがなしこのごろきけば刈りつぎにけり

無花果

無花果に隣の御坊のぼりをりひとつふたつは食べにけらしも

氷の罅

氷の罅

死顔

顔の上^への蔽ひのガーゼとりにけりまこと死にせり鼻の尖りも

死顔のこの鋭^とき鼻よこの伯母ぞ吾が母に最^{もと}も辛^{つら}く当らしき

強^{こはもて}面の伯母なりしかなほそぼそと死にたまひけり白髪染して

伯母の子の二郎そだたきその御足そろへまつるに人皆泣きたり

二郎よ俺は泣くなり故は無し泣かじとをすれど声のさぐるに

幼き日を思ひて

伯母の御の死顔見れば土の鳩ほろこほること吹きし日泣かゆ

雉子ぐるま子の雉子のせて走りけり幼児われは曳きて遊びし

第一夜

あかあかとこの夜灯ともさな亡き人もひたにさむきはおそれたまひき

目まぜして爛場かんばへつどふ夜の寒さ酒のたぎりがただ待たれつつ

通夜酒に酔へどけぎむき夜のほども煮ゆべの昆布も青うねばりぬ

通夜の酒すぐさめやすし火は搔かきて頭寒けば外套をかぶる

第二夜

三宝の大き蕪かぶらにとりそへて人蔘はよし朱あかき垂たりひげ鬚

亡き伯母の笑^ゑまししをどり踊^まらしすべからくのめこのうま酒を

神あがり伯母のみ霊も見そなはせ涙垂りつつ手うちをどるを

火葬場道

きはやかに物の気の澄む冬の晴れ棺はゆきぬ影をしるして

野の窪の牧場にかがむ牛のむれ閑^{しづ}かさすぎてかかはりもなし

競馬場の柵しがらみ白くこなた辺や蕪と大根おほねのなぞへ段畑

冬空のうつりて青き海のいろ火葬場道はゆきつつ高し

逝くものは影しとどめず風かざなみ並に冬の光も流れたりけり

冬空に煙突白くつき立てり伯母の棺もいたりときぬ

茶店にて売れり

人の世はつひに幽けし青竹の弾はじき鉄砲に澄む冬のいろ

第三夜

何しかも過ごし酔ひけむこの夜さり声あららげて人を叱りし

夜の神酒みきに我酔ひけらし斑いかるが鳩やほろこほろことまねて寝にける

少女どち中に寝よちふうれしくて雑まじり寝にけり魚ととよと云ひて

骨あげ

うつし世の焼場の前の日のあたりぬるき番茶はすてて出にけり

骨^{こつ}あげて帰る丘べの霜ぐもり常にもがもな人は咳^{しはぶ}く

冬枯のアスパラガスに実はのこりそこらく赤し搔きわけにけり

礼まはりの日

礼まはりとざまかうざま日は寒し高き梢の頬白のこゑ

その製氷会社は従兄の経営するところなり

ほどほどに機械うごかす短か日の氷室ひむろの氷見にも寄るなり

繁しじに見てあつき涙のこぼれけり角かくの堅かたごほり氷のまつしろの罅ひび

鉄管に霜結晶し早やしろしアンモニヤ瓦斯はよく冷ゆるらし

外とにうごく夜鳥の影は大きけどさむざむとあり製氷の照り

象の鼻

鼻の垂りゆたにかいあげ象の子の物食める見ればその目笑へり

真まつかう向より皺だみ垂るる象の鼻どこからが鼻ぞ訊きいて見よ子よ

おもしろの象の鼻や食むなればあの鼻の下に口かも知るらし

子の象の寒けき見れば鼻の垂り振りは揺りつつひたすらにあり

高たかすね髓の毛に凍みこごるちらちら陽駝鳥は寒し張りてあゆみぬ

夕かげにゆるぎいでつつさむざむし駱駝は髯を反らしたるなり

へら鷺のついでにみたらす黄の鰯家鴨ぬすまむ佇みにあり

軽鴨の池に遊ぶは寒けかりとりのこされし急ぎ追ひをる

梅の萼

春もまだ物書きいそぎいとまなし風呂立てさせて夕べ過ぎたり

早やあかる梅の下道走らして子が自転車の輪は走るなり

口あけばちやちやとのみいふ子に見せて萼うてな愛しきあちむきの梅

さるかたへとなりの御坊越されけり萼ばかりのしら梅のはな

母としか湯には入らずと子は云へりひとりひたれり梅の萼見て

梅の萼赤く見づらし湯にひたり水鉄砲を吾子あことはじかす

梅の蕊赤く毛ばだち雨しげし種痘のふれの今朝は来りし

国をおもふ歌

恙ありてまゐるすべなしひたごころ堪へつつ猷ぐ国おもふ歌

国おもふこころを堪へて我がこやる窓への春はいまだ浅かり

国おもふこころはさやぐ葦鴨の乱れて寒し波立つなゆめ

み民われ思はずあらめやおほきみの
おほみことのり大御詔にあひにけるかも

国を思ひ御詔みのり伝ふと大鳥の立たしし君がきほひ猛しも

青空文庫情報

底本：「白秋全集 9」岩波書店

1986（昭和61）年2月5日発行

底本の親本：「風隠集」墨水書房

1944（昭和19）年3月20日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※小見出しよりもさらに下位の見出しには、注記しませんでした。

※「葦」と「蕊」、「竝」と「並」、「※」[#「窗／心」、第3水準1-89-54]」と「窓」、「萼」と「萼」の混在は、底本通り

です。

入力：岡村和彦

校正：フクポー

2017年12月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

風隠集

北原白秋

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>